

『春寒便り』

後志教育研修センター
所長 長谷川 誠



調査研究事業報告会の成果

寒中お見舞い申し上げます。1月11日（木）に、「令和5年度調査研究事業報告会」を倶知安町文化福祉センター公民館中ホールにて開催しました。ご来賓として、後志教育局の新居局長、後志町村教育委員会協会の細田会長、後志教育研修センター組合の村井教育長にお越し頂きました。後援名義の教育研究団体代表の方々にもご臨席いただき、熱い視線に所員は少し緊張した面持ちで臨んでおりました。

調査研究の中間報告と位置づけされる本報告会は、当日参加も含めて管内から75名の参加を得ました。今回の大きな成果の一つに、教諭等の先生方（所員を含む）と社会教育担当者が全体の半分以上を占めたことがあげられます。また、質疑応答の時間は全てこの先生方の発言で、会場での大きな熱量を感じ取ることができました。昨年度は管内で認知が低かった、センターが推奨している板書型指導案と指導案バンクが、学校や一般の先生方に少しずつ広まりつつあることを実感できました。

私は社会教育に関する調査研究の報告と助言が勉強になりました。渡辺主査が学校教職員の参加が多いことを踏まえて、学校教育と社会教育の連携について具体的な資料を準備され、時間をかけて説明してくれました。両者が互恵的な協力関係をもって地学協働を進めていくことの重要性を共通理解することができました。このことは学校教職員にとって新たな学びとなり、大きな収穫となりました。



〈会場の様子〉

R6講師陣の意気込みを実感

1月末に令和6年度研修講座に向けた講師団会議が行われました。非常に手応えがある両日でした。手応えの一つ目、59人の講師が一人も欠席することなく、集合したことでした。手応えの二つ目、講師陣の反応です。今回の会議では、2つの話をしました。

一つは、『教学半』という孔子がまとめたといわれる経書のうちの『書経』に書かれていた言葉です。「教うるは学ぶの半ばなり」と読み、「人にものを教えるときは、自分自身が勉強してよく理解していなければ教えられない、つまり半分は自分にとっての勉強になる」、生涯を通して、学び続けることの大切さを教えています。

実は、講師団会議1日目分科会の折、「所長、『まな板の鯉』になりました」といって授業実践を申し出たという講師がおりました。私は研修講座の中で、「教員10年目までは、一年に一度は授業を公開して、たくさんの人から批評や助言を受けて下さい」とお話ししたことがありました。この先生はそのときの閉講式の話覚えていて、今回自分で手を挙げたのですね。まさに学び続ける教師を体現しています。

もう一つは、『子どもの心の扉は内側に鍵がある』、この言葉は北海道家庭学校の校長であった谷 昌恒先生が言われた言葉です。『教育力の原点～家庭学校と少年たち～』の著書の中に納められています。

今回は、「この言葉は新約聖書の『ヨハネによる黙示録』の『扉を叩くイエス』の中から引用されたもので、谷先生が自らが少年達の心の扉を叩くイエスになろうと決意されたのではないか、家庭学校の少年達への愛の深さと覚悟を物語っている言葉です……」ということをつけ加えました。実は、私の『心の扉』の話を聞いた、今年度の受講者であり、新年度の講師でもある先生が教えてくれたものです。



〈学級経営講座 初任段階の先生方〉

私たち教職員の仕事は、その出会いやその言葉がけの一つ一つが子ども達の未来に影響を及ぼすことがあるとするならば、一期一会でその瞬間、瞬間を大切にしていかなければならないと考えます。

今回の講師団会議は講師陣の真剣な眼差しがとても印象的で、新年度の研修講座は質の高い研修内容が期待できると実感した二日間でした。

《R6.2.8》

